

11月2日 IFERI セミナー報告

人文社会科学部一貫制博士課程3年次

長谷川 詩織

“Sensational” Africa: Roosevelt’s Cultural Politics and Expeditionary Filmmaking 1909-1910

本発表は、IFERIプロジェクトの一環である電子ジャーナル *Inter Faculty* に投稿予定の英語論文である“Sensational” Africa: Roosevelt’s Cultural Politics and Expeditionary Filmmaking 1909-1910 のうち、とりわけ映画分析を中心とする箇所を焦点化して行われた。1910年前後に製作された探検記録映画もしくは探検再現映画は、さまざまに議論の余地を提供する特性を持っている。しばしば指摘されることは、「プリミティヴな」場所を特化した最初期の記録映画は、人類の「起源」を探索すると同時に植民地主義の達成を視覚化する、二重の意味を帯びた文化人類学的な関心に基づいているということである。文化人類学的関心というとき、その意味する範囲はきわめて広域であり、映画製作における影響関係も多様である。そこで本発表では、とりわけナチュラル・ヒストリーと映画製作の緊密な関係性に注目し、いかに探検記録映画もしくは探検再現映画の製作を後押ししたのか、いかなる文化的フレームワークを提供したのかを考察していった。

今回の発表では、二つの作品 *Roosevelt in Africa* (1910)と *Big Game Hunting in Africa* (1909)の製作過程、作品に関する批評、観客の受容に関して、筑波大学附属図書館に所蔵されている映画業界誌 *The Moving Picture World* に掲載されている記事の収集と分析の結果を軸に紹介した。独立系映画会社を特化して扱う *The Moving Picture News*、文学・芸術・科学・政治など広域なトピックを網羅する *The Atlantic Monthly*、セオドア・ローズヴェルト、チェリー・キーアトン、カール・エークリーなどによる書籍も調査対象にすることで、ナチュラル・ヒストリーと映画製作とのあいだにある横断的關係性を明らかにすることを試みた。とくに二つの作品の分析を通じて、合衆国文化にとって「アフリカ」がいかなる意味を持ちうるのかを明らかにすることを試みた。

合衆国文化言説という見地から探検映画記録映画もしくは探検再現映画を考察し、そこに新興メディアである映画が果たした役割を照射することによって、必ずしも植民地主義に回収されない「アフリカ」の認識論的または表象的フレームワークを提示することが本研究の最終的な目標である。しかし、関連する映画フィルムが必ずしも残存しているわけではなく、とりわけ Selig 社の *Hunting Big Game in Africa* (1909) が残っていないという現実は、説得力のある議論を展開するうえで少なからず弊害となった。また、使用するタームに関する課題も浮きあがってきた。文化研究では、さまざまな言説のあいだにある緊張関係を「ポリティクス」または「政治性」と言い換える。この点について、政策研究を専門とする参加者から、その使用方法が漠然としているように思えるとの指摘があった。「ポリティクス」と表現するとき、言説や価値観などといった目に見えないものと、具体的な政策などといった目に見えるものと、二つの意味を持ちうることを、常に意識化することの重要性を再確認した。

質問やコメントの多くは、発表者のディテールに関する説明不足に起因するもの、またはオーバー・ステートメントに起因するものであるように思われた。この二つの課題の解決は、実証的調査に基づきながらも、映画研究とその隣接領域を横断しうるような、より大きな研究のフレームワークを作っていくために必須である。異なる領域に所属するがゆえに提起される基本的な質問、素朴な質問が、逆に本発表に内在している本質的な「欠点」を認識する良い機会となった。

以上